CRAFT POINT KYOTO

京都工芸地図

Kyoto Kougei Trip | issue Around GOSHO

ISSUE 御所まわり

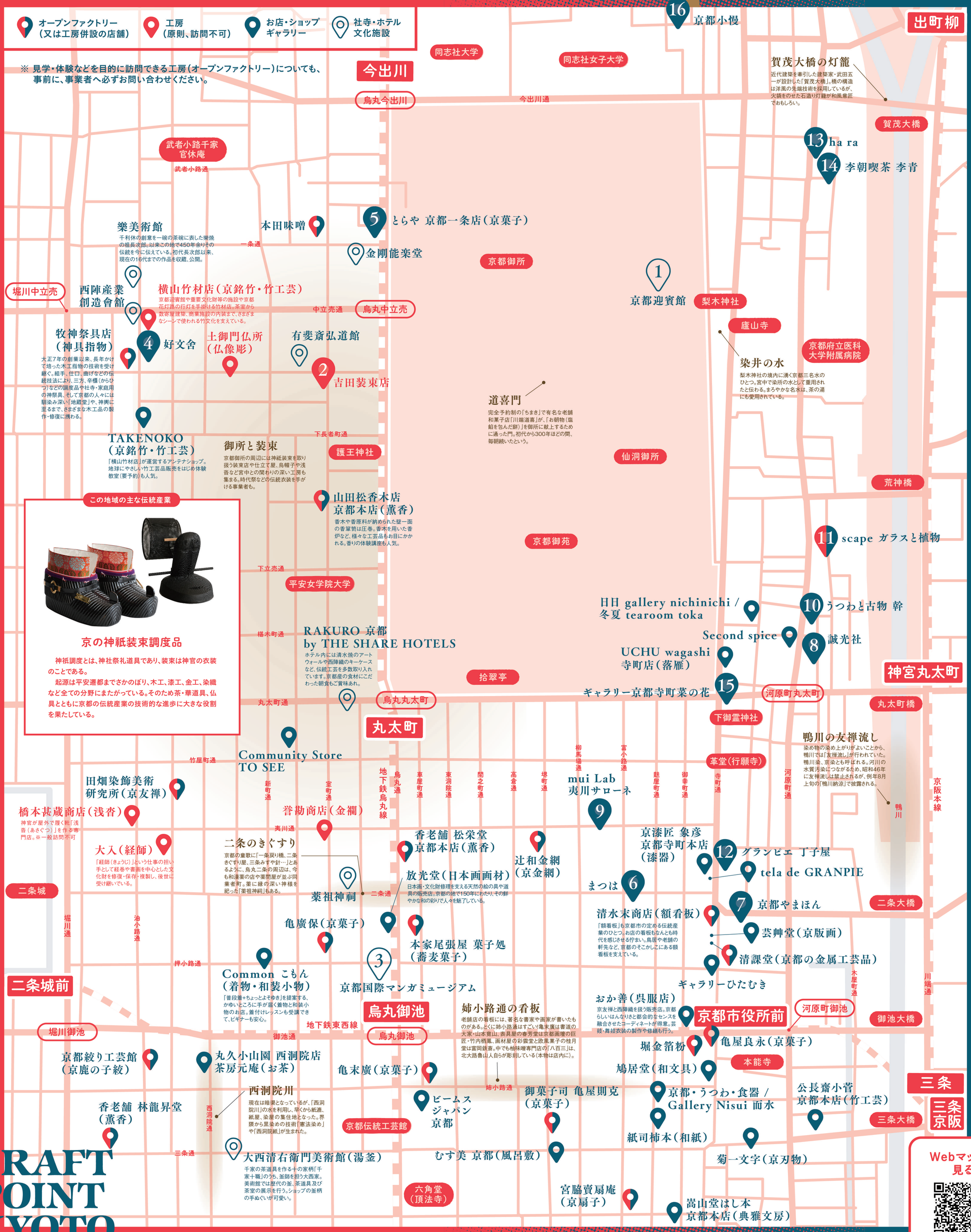
優れた工芸のショーケース

京都御所を中心として東西南北に広がるエリアだが、工芸目線で歩いてみるとまた違った驚きを得ることができる。やはり起点にしたいのは御所。

「京都迎賓館」で京都が誇る最高峰の伝統工芸技術に触れられるのはもちろん、紫宸殿に立つ「左近の桜（かつては梅）」や「右近の橘」には、日本的な美の原点を見ることもできる。

御所周辺を歩くと、明治以前から調度や装束を宮中に納めてきた職人たちの工房や、各地の神社や神職が必要とするものを扱う装束店、「御所御用（御所への出入りを許された）」の暖簾を掲げる和菓子店が多いことにも気づく。また釜師（茶釜などの鋳物職人）が住む釜座（かまんざ）が集まっていたことに由来する釜座通があるように、茶道・三千家の道具を作ることを業とした家系「千家十職」の拠点もこのあたりに多い。彼らは代々御所の造営や御所御用としての制作も賜ってきた。

古くより御所に信頼を置かれてきた作り手たちが集まり、ここに残る“意味”のある者や店が残った。そこに感度の高い人が引き寄せられ、今の街並みを形成している。その意味では、御所まわりという町そのものが、優れた工芸のショーケースと言えるのだ。



この地域の主な伝統産業

京の神祇装束調度品

神祇調度とは、神社祭礼道具であり、装束は神官の衣装のことである。

起源は平安遷都までさかのぼり、木工、漆工、金工、染織など全ての分野にまたがっている。そのため茶・華道具、仏具とともに京都の伝統産業の技術的な進歩に大きな役割を果たしている。

Webマップを見る

京都工芸地図 | Kyoto Kougei Trip | issue Around GOSHO

京都の伝統産業 Traditional Industries of Kyoto

@densannohi

京都伝統産業ミュージアム Kyoto Museum of Crafts and Design

主催：京都市、京都伝統産業ミュージアム（株式会社 京都産業振興センター） https://kmtc.jp/

CRAFT POINT KYOTO

01 日本の伝統技能の粋を集めた京都迎賓館で名匠の技を拝見。

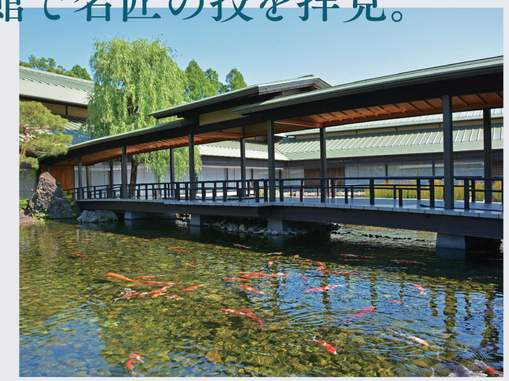
海外からの賓客をお迎えし、日本への理解と友好を深めていただくことを目的に、2005年に開館した国の迎賓施設。接遇等に支障のない範囲で通年での一般公開を実施しており、参観することができる。

建物や調度品には、数寄屋大工、庭園、截金、西陣織や螺鈿、蒔絵などの京都を代表する伝統技能が活用されている。ここではぜひ“匠の技”に着目して、細部に目を向けてほしい。

庭園は御苑の緑を借景とし、広大な池を中心にさまざまに表情を変えながらも、周囲の建物に溶け合うように配置され、庭園と建物が一体となり調和した“庭屋一如”の思想を体現している。東西の建物をつなぐ廊橋は吉野杉を使用し、天井は船底を逆さにしたような「船底天井」の形。四隅には昆虫の透かし彫りが施され、細部まで目を楽しませてくれる。池に浮かぶ和舟は船大工の手によるもの。海外からの賓客に日本文化の舟遊びを楽しんでもらいたい、という想いがそこには込められている。

京都迎賓館で最も大きい部屋で、晩餐会や歓迎式典の会場にもなる「藤の間」にも見どころは多い。正面の壁面装飾は、日本画家の鹿見喜陌氏の下絵をもとに「綴れ織」の技法で織った織物で、藤の花をはじめ全39種の草花が織り込まれている。床に敷かれた段通の模様には、まるで壁面に描かれた藤の花が舞い散ったかのような演出。天井からは、本美濃紙と京指物の伝統技能が使われた格子光天井が、やさしい光を届けてくれる。

日本の伝統技能の粋を集めた、和のおもてなしの最高峰と言えるだろう。



庭園からは“庭屋一如”の世界観を存分に感じることができる。

庭園の池にある和舟。池の浅さを考慮して、船底が平らになっている。

「藤の間」の格子光天井。「和風」の連風のような3段の笠は高さが調節でき、そのパターンは15種にも及ぶ。

「藤の間」の綴織り作品「麗花」は、鹿見喜陌氏の下絵をもとに川島織物が製作したもの。400色もの絹糸を染め、遠目では織物とは思えない緻密さを実現している。

① 京都迎賓館 | ☎075-223-2301 上京区京都御苑23 ガイドツアー（一般 2,000円）10:00〜17:00（15:50受付終了） インターネットからの事前予約優先

02 御所まわりに集まる装束店に、未来を見据えた変化の兆し。

装束店といえば、神社で着られる装束を納品するに留まらず、その着付けやメンテナンス、神具から賽銭箱のことまで、神社のあらゆる業務を「御用聞き」的にこなす神社の総合商社的存在。御所まわりには、そんな装束店が全国随一の密度で集まり、それぞれが全国各地の神社の御用達として京都から各地を飛び回っている。

「装束は神職の制服みたいなものでまず無くなることはないですし、仕立てには着物とはまた違った特殊技術が必要で。他の伝統工芸と違って、決して需要が細っているわけではないのに、仕立ての担い手、後継者が育っていないという課題がありました」。そう話してくれたのは吉田装束店の吉田恒さん。仕立て屋はほぼ個人事業主ばかりで後継者育成もままならず…ということで、2016年には4つの装束店が共同で「京都仕立工房」を設立し、大学でテキスタイルを学んだ学生らの雇用を始めた。「既存のイメージを払拭したくて、工房はあえて街なかのビル内に。できるだけ柔らかく、難しくなくやっていこうって」。

今では6人の女性が働く京都仕立工房。神祇（じんぎ）装束の日常着化を試みたいと吉田装束店とコラボしたオランダのファッションデザイナーが、京都仕立工房に2か月通い詰めて装束ならではの縫製を学ぶなど、装束業界の窓口のような役割も果たし始めている。これまであまり表立って見聞きする機会の少なかった「有職故実」の世界にも、少しずつ変化の兆しが現れてきたようだ。

参拝者への祈祷時に着られる「狩衣（かりぎぬ）」は、七五三やお宮参りなどで目にする機会の多い装束。色、柄に決まりがなく、神主や装束店の個性が出しやすい。能楽で役者たちが着るのも装束。

京都仕立工房は烏丸通に面したビルの一室に。吉田装束店、井筒装束店、高田装束店、斎藤専商店が「腹を割って」運営。

取材時は舞台衣装の奴袴（ぬばかま）、狩衣などが手際よく製作されていた。「有職文様」はそれぞれに意味を持つ。

② 吉田装束店 | ☎075-441-3797 上京区堂町通上長者町下ル清和院町555-2 一般見学不可

03 マンガミュージアムの火の鳥、実は仏像彫刻の技術でできています。

吹き抜け空間に掛かる、手塚治虫「火の鳥」の巨大オブジェ。今ではすっかり施設のシンボルになっているが、実は仏像彫刻の最高峰ともいえる技術が駆使されている。手がけたのは伝統工芸士の須藤光昭。佐川定慶、錦戸新観といった時代を代表する仏師の下で修業を積み、2013年には厚生労働大臣賞を受賞。卓越した技術を誇る京都の仏像彫刻界のなかでも名工と呼ばれる存在だ。寄せ木造りで、仕上げに布を貼り、白地を塗り、彩色を施した。翼を広げて飛び立つ様を1階から仰ぎ見るのも迫力があるが、2階の廊下から至近距離で細部をじっくり眺められるのがここでの醍醐味。注目は、仏像の目の部分をくり抜き、内側からクリスタルをはめ込む「玉眼」の手法を使った大きな瞳。確かに、吸い込まれそうになる感覚は、寺院で仏様のお顔を拝見する時とちょっと似ている。

© Tezuka Productions

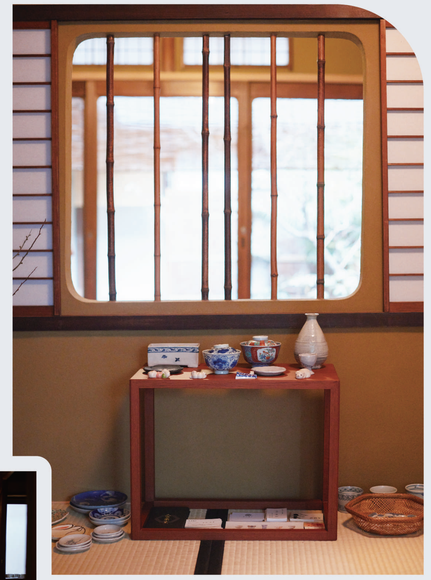
幅11m、高さ4.5mの紅松製で、2009年にお披露目された。日没後に建物の外から見ると、神々しい輝きを放つ火の鳥が内部に浮かび上がり、日中とはまた異なる表情をみせる。

③ 京都国際マンガミュージアム | ☎075-254-7414 中京区烏丸通御池上ル（元龍池小学校） 10:30〜17:30 最終入館17:00（火・水曜、年末年始休）

04 路地奥の好文舎が目指すは、御所西の「お茶の間」のような場。

御所西エリアでは、歴史ある和菓子店や工房が居を構える一方で、新たな世代のカフェやお菓子屋なども増えている。このエリアの細い路地奥で2018年に開店したのが「好文舎」。以前は悉皆屋（しっかいや）だったという明治期の京町家を改装して、場所柄、敷居の高い店舗にもなりそうだが、店主の宇野さんは展示会や文化教室などに積極的に場を提供して、多様な人が集う場に。

「工芸との接点の始まりは、六兵衛窯の清水宏章さんにお声がけをして個展を開いていただいたこと。そこから紹介、紹介でいろんな方のつながりが増えていきました」。近所の老舗和菓子処「金谷正廣」や「オハヨービスケット」の商品を持ち込みOKにしたり、近隣の骨董屋とのコラボ展を開いたりと、界隈とのつながりは年々増えるばかり。「何気なくお茶しに来た若い人が陶芸作家に出会う。そんな機会をもっと増やしていきたいですね」。



展示は床の間や玄関間などを活用。取材時は現代の陶芸作家と古物とを取り合わせた「古今の器くらべ」が開催されていた。

中庭には店名の由来ともなった梅の木が2本。京町家らしく気持ちのいい風が通り抜けていく。

店主の宇野貴佳さん。床の間の日本画は季節によって掛け替えられる。

④ 好文舎 | ☎090-9697-7255 上京区油小路通上長者町上ル甲斐守町118 10:30〜18:00 日曜休

05 名門菓子屋×老舗味噌屋×日本画の大家…京都限定の白味噌羊羹をゲットせよ。

全国的な知名度ゆえ東京の銘菓とも思われがちなとらやだが、創業は室町時代後期の京都。御所に程近い京都一条の地では代々「御所御用」を勤めてきた。ちなみにとらやでは今でも製造所のことを「御用場」と呼ぶそうな。手土産を求めに訪れるなら、京都限定の「小形羊羹 白味噌」はハズせない。天保元年（1830）創業で、とらや 京都一条店の近くに店を構える本田味噌本店の西京白味噌を使ったもので、白味噌のまろやかな味わいがクセになる。

パッケージのはんなりとした絵柄は、京都生まれの日本画家・図案家の神坂雪佳の絵がモチーフ。神坂雪佳は明治から昭和にかけて絵画と工芸の分野で活躍した作家で、アール・ヌーヴォーなどに影響を受け、モダンで明快な作風が特徴だ。食べてはもちろん、食べる前から美味しい逸品なのである。

「小形羊羹 白味噌」と、同じく京都限定販売の「小形羊羹 黒豆黄粉」（共に税込292円）。パッケージは、近代工芸の意匠に大きな影響を与えた神坂雪佳。雪佳の作品を出版してきた寺町二条にある出版社、芸艸堂（うんそうどう）も訪ねてみれば、菓子に込められた感性により触れられるだろう。

とらやへ注文をした記録が残るのは、御所や公家のみではなく「水戸黄門」として有名な藩主・徳川光圀や絵師・尾形光琳の名も。

⑤ とらや 京都一条店 | ☎075-441-3111 上京区烏丸通一条角広橋殿町415 9:00〜18:00（毎月最終月曜12月を除く、元日休）

工芸的視点で見た御所まわりの歩き方

このエリアに関わりのある方に、工芸という観点から見ておすすめの場所 ヒト モノ を聞いてみました。

⑥ カフェのまつは

町家を改装された内装は、古く作られた部分への敬意を持った丁寧な造作がなされており、中庭から差し込む自然の光と、窓のそとに見える季節の変化を感じられる心地よい場所です。定期的におふくろ市という工芸作家さんの展示販売も行われています。

⑦ 工芸ギャラリーの京都やまほん

全国から集められた作家の作品が白い店内に配置され、ものをじっかりと見ることができるよう作られた空間。通りに面した窓に設けられた手織りシルクのスクリーンは、外の景色から光のみを抽出して感じることができる。

⑧ 書店の誠光社

店内では私たちの開発した木製のスマートデバイス「muiボード」が掛けられ、日々の店主の言葉を受け取ることができる。コンピュータに本を推薦される時代に、本屋というちょっと寄り道ができる場所にしかできないことを実践されているように思う。

⑨ プロダクトデザイナー 廣部延安さん

1929年創業の美術印刷「NISSHA」発のスタートアップ「mui Lab」でデザイナーを務める。伝統と最新技術が融合する街、京都の佇まいや気配も設計思想に影響を与えている。

⑩ うつわと古物 幹

器は京都や唐津など様々なものを、古物は日本の古い物を中心に扱うお店です。古い物だと、江戸後期の瀬戸の石皿を購入させてもらったことがあります。店主の方がとても気さくでいろいろ教えてくださるので、そんなお喋りの時間も楽しみによく伺っています。

⑪ ステンドグラス作家の西冨なつきさん

ステンドグラスで花器やアクセサリーを作っている作家さん。彼女と直接話しながら作品を買えるのが、アトリエ兼ショップ「scape ガラスと植物」です。彼女のセレクトの蘭もたくさん飾られていて、蘭とステンドグラスの組み合わせが織りなす世界観がとても素敵です。

⑫ グランピエ

世界各国の民藝品のお店。タイの手漉き紙やインドのラグやラクダの革を使った照明など、お店のインテリア用に様々な物を購入させてもらいました。手作業の品々は一つとして同じ物はなく、自分にしっくりくるものを見つけるのは宝探しのようで楽しい時間です。

⑬ カフェオーナー 原こころさん

京都のレジェンドカフェ「efish」で8年勤務。店長経験を経て、2020年にカフェ「ha ra」を御所東にオープン。鉄板でカリッと焼き上げるサンドイッチが看板メニュー。

⑭ 李朝喫茶 李青

身体にやさしい韓国のお茶や軽食をいただけるお店。店主の鄭玲姫（チョンリンヒ）さんが集めた韓国の家具や骨董、お庭を眺めながら、時間がゆっくり流れます。入店した瞬間からその世界観にうっとりし、充分に堪能したのに、いつも後ろ髪を引かれるように店を後にします。

鄭玲姫さん

「李朝喫茶 李青」の店主。「京都小慢（シャマン）」に来てくださる時も、多数の商品のなかからあっという間にお眼鏡に叶った数点を手に取り、その滞在時間の短さにいつも驚かされます。高い審美眼をお持ちで、素敵な人や物が彼女を慕って集まってくるような印象を受けます。

⑮ ギャラリー京都寺町 菜の花

小田原にあるギャラリー「うつわ菜の花」が2022年、京都寺町にオープンしました。店主の高橋台一さんは、2021年春に亡くなった陶芸家・黒田泰蔵さんとのご親交も厚く、小田原では貴重な作品の数々を見せていただきました。その京都店ということで今後が楽しみです。

⑯ 中国茶講師 田中一代（ハルヨ）さん

「京都小慢」の運営及び厦门（アモイ）委氏の日本でのアシスタントを務める。同店にて中国茶教室初心者クラスの講師を担当、横浜で中国茶教室「遠茶」を主宰。

編集：池尾 優、竹内 厚、bank to デザイン：猿田真維（bank to） 撮影：小檜山貴裕